▼最優秀賞受賞作品（小説）

# おこまさん太平記

石川裕子

## ダイヤモンドの指環

主人の祖母の、おこまさんは米寿の祝を過ぎた頃から、少しずつ、少しずつ呆けが進行してきた。

ある日、家族全員が、朝食をすまして、各自の用事をしている時だった。

「良子さん、大変や、あたいの指環があらへんわ。誰かに盗られたんや。どこさがしてもあらへんわ。あのダイヤの指環は大事な大事なものやさかい。どうしよう。泥棒が入ったんやろか。いつ、どこから入ったんやろ」

「おばあちゃん。いつも箪笥の小抽斗にしまってはったやない。用事終ったらさがしてあげますわ」

祖母の従弟が、昔、外国航路の船長をしていて、その時にアメリカで買ってきてもらったダイヤの指環だった。小粒だが、プラチナの台にはめこまれた上品なダイヤだった。光にあたると、ブルーにもピンクにも輝いて、すてきな彩を放った。

「この指環は、代々この家をつぐ人にあげるさかい覚えといてな」

大阪の親戚へ行く時、高田本山の婦人会の新年会の時、お芝居を見る時など、盛装をした手にいつもはめて出かけていた。華奢な手によく似合っていた。

朝食の後片づけと、たくさんの洗濯物がやっと終って祖母の部屋へ行く。

いつもきちんと整理されていた箪笥の小抽斗が、ぐちゃぐちゃになっていた。おまけにリンゴとみかんのくさりかけたのも出てきた。朝早くから一生懸命にさがしたあとだった。色色の小物をたたみ直して、青い指環のケースをさがすがどこにもない。

大きい抽斗を開けてゆく。観音開きになっている衣装箪笥を開けてゆくと、祖母が大切にしていた留袖の着物の袖の中に、指環があった。白い奉書の切れはしに包まれていた。そしてつむぎの羽織の上に青いケースが置いてあった。

二、三日してからのことである。大阪の祖母の弟さんから電話がかかってきた。

「もし、もし、良子さん。姉さんから手紙もらいましたけど。どうしましたんや。なんや知りませんけど、ダイヤモンドの指環が、なくなったと書いてありましたわ。きっとどこかへしまい忘れてますのやろ。

もう、年が年でっさかい、貴女はんがしもときなされ。わたしが替りの指環送ってあげますさかい」

家の前の一身田駅には、赤いポストが立っている。字を書くことは、若い時から得意な祖母だった。多分弟さんに指環がなくなったと、手紙に書いて投函したのであろう。足も達者、目も手も達者。私達の見てないすきに出しに行ったのだろう。

その翌日、大阪のおじ様から、小さな包みがとどいた。紺色のケースに入った男物の部厚い金の指環であった。

「おばあちゃん。大阪のおじさんが指環送ってくれはったよ」

と、さっそく祖母の部屋へ持ってゆく。

「フーン。こんなごっつい指環とちがうわ。わたいのは、ダイヤモンドでっせ。こんな重いのようはめやんわ」

と、良子の前に、ポイとほうり投げて横を向いてしまった。

先日大さわぎをしてさがし出した指環を、又、どこか奥の方へしまったらしい。

その翌朝、まだうす暗いうちから

「ない。ない。ない。又盗まれてしもうたわ。どんだけさがしてもあらへん、ダイヤの指輪が」

と、叫びだした。家族は黙ったまま、白けた顔をしていた。

丁度、お勝手の掃除をしてもらっていたお手伝いさんが、言ってくれた。

「おばあちゃん、一ぺん大里の神社へ連れてってあげましょか。あそこの宮司さんは、なんでもよく当てますそうや。誰に盗られたか、どこへ失ったのか拝んでみてもらいましょ。旦那さん、悪いけど車に乗せてっておくなされ。わたしがおばあちゃん連れてってあげますわ」

九時過ぎになって用事が終った主人が、しぶしぶ車を出す。

「めんどうやなあ。そんなん行ったって当たろかさ」

「ちょ、ちょっと待ってや。お宮さんゆくのやったら着替えてくるさかい」

祖母は自分の部屋へ行って、大島紬の着物に博多の帯をしめ、黒羽織を着て、白足袋にはきかえ、正装をして、いそいそと車に乗って行った。

一時間ほどして帰ってきた。お手伝いのおばさんは、ゲラゲラ笑いながら祖母の手を引いて玄関の上り框に腰を掛け

「あんな。宮司さん、さっそくとお祈りとお祓いをしてくださってな。おまけや言うて大太鼓もどーんと一つたたいてくださったわ。

そしてな、『安心しなされ。箪笥の抽斗やなくて茶箪笥の一番下の抽斗に入ってる』て言われましたわ。よう見たげて下さいって言われましたわ」

皆がしゃべっている間に祖母の姿はなかった。自分の部屋へ入って小ぶりの茶箪笥の抽斗を開けていた。

「あった。あった良子さん。茶箪笥のな、いつもからくりの抽斗や言うとるところに入ってましたわ。あの宮司さんよく知ってはるなあ。御礼言っといてな」

しかし、又、二、三日すると

「指環がない。指環がない」

と、同じことを言い出した。

たまたま、良子が名古屋へ行く用事があり、松阪屋の宝石売場で、安いプラチナ風の指環を買って来た。夕食の後で、
「おばあちゃん、これ、おばあちゃんの指環とちがいますか」
と、言って祖母の指にはめてあげた。
しばらく祖母は、じっと手をかざして見ていたが
「良子さん、これは違うわ。あたいのは、こんなへなちょこの安物とちがうわ。こんな安物はいらん」
と、指からはずして食卓の上へ置いた。安物といっても、良子のその時のお小遣いの中では高いものであった。
良子は、そうっと拾ってケースに収め、大切にしまっておいた。

## 切符

「一身田駅まで一枚切符売ってほしいんやけど」
「おばあさん、どこへ行くんやな？ここが一身田駅やけど」
「あんな、聞いて。あたいもう大阪に飽いたので、一身田の家へ帰りたいんさ。一身田までの切符ありませんのか？　たのみますさかい一枚売ってんか」
「あんな――ここは一身田の駅……　一ぺんお嫁さんにきてもろうてんか」
「ふん！　売ってくれませんのやな。けちやな、ふん！」
と、言って祖母のおこまさんは家へ帰ってきた。家は一身田駅のまん前で、駅と向いあって建っている。
「良子さん、良子さん、早う一緒に来てんか。駅の人がな切符売ってくれませんのや。お嫁さん呼んで来いって言ってるで一緒に行ってんか」
お勝手で茶わんを洗っていた手を休めて、良子は玄関に行った。
「おばあちゃん、何しに駅へ行かはるんですか？」
「あんな。大阪に飽いたので一身田の家へ帰りたいんさ。それで切符買いに行ったら、駅長さん売ってくれませんのや。あんたも行って頼んでんか」
「はい。はい」
良子は手を拭きながら笑いがこみあげてきた。祖母の手には、しっかりと千円札が二枚握られていた。
良子は祖母の手を引いて、駅の前まで行く。津駅より早く建てられた駅舎の玄関には、大きな一枚板で、「一身田駅」と、書かれた看板がかかげられている。
「おばあちゃん、しっかり仰むいてみて。一身田駅って書いてありますやろ」
「あ！　ほんまや、いつ帰ってきたんやろ。大阪の弟の家におるもんやと思ってましたがなあ。わかった。わかりましたわ。ああ、恥ずかしい」
と、振り向きもせず、スタスタと家の玄関へ入って行った。足は丈夫で早い。
「駅長さん、すんません。この頃うちのおばあちゃん、だいぶ呆けてきましたんやわ。これからもちょいちょい来ますやろで、うまいこと言って帰して下さい。お願いします」
「わしゃーびっくりしましたがな。何べん言っても一身田駅まで切符売ってくれってきかはらしませんので弱りましたがなあ。それこそ狐に化かされたんかいなと思いましたが。これからはうまいこと言ってあげますわ。大変やなあ。家の人は」
祖母のおこまさんは、毎年、春と秋、年に二回ほど大阪へ行っていた。大阪で、丁稚奉公をしてたたきあげ、乾物屋を営んでいた祖母の弟の所へ遊びに行くのだった。
祖母は、八人姉弟の一番上で、弟四人が大阪へ出て、それぞれが立派なお店を持っていた。
その中でも一番下の弟さんが焼海苔の工場を持ち、デパートへも手広く販売網を広げ、店は日本橋に、本宅は東大阪に建てていた。その弟と気が良く合って、毎年、祖母を招待してくださった。
大阪へ行くと、半月ぐらい滞在して、今日はお芝居、明日は有馬温泉の花見と、いろいろな所へ連れてもらっていた。その間に、あとの三人の弟の家も訪ねていた。どこへ行っても、一番姉ということで、いばってそれぞれのおうちで御馳走を頂き、大満足をして一身田の家へ帰ってきては、自慢話ばかりしていた。
時々、一番下の弟さんが、一身田へ来ると、
「もう姉さんは、わがままですさかい、かないませんわ。お芝居でも急に言わはるから、入場券買うのに難儀しますんや。いい席やないとあきませんやろ。高い金出して、特別に手に入れるんですわ。それがな、一昨年あたりから、お芝居見てても居眠りしてはんのや。つかれてはんのやなあ思うておりますけど、年が年ですさかいなあー」
と、ぼやいていた。
「子供のいない姉さんが可哀いそうやと思っていろいろ気遣ってあげますんやけどな。都はるみの舞台で、ガンガン音楽がひびいている時でも、一番前の席で口開いてねてはるんですわ。せっかく無理して高い入場券買ってあげましたのに」
「すみません。おばあちゃん、大阪から帰ってみえると、いつも楽しかったわ。お芝居ぎょうさん見せてもらってと喜んで自慢してみえますよ」
「来年は、あんたさんも一緒について来とくなはれ」
大阪から帰ってくると、墨をすり、毛筆で和紙にさらさらと書いて、それぞれの弟さんに礼状を出していた。住所も間違いなく、しっかりと書いていたのには感心させられた。
「わたしら姉さんに手紙もらっても、字が上手すぎて、よう読まんときもありますわ」
と、言っていたおじさんの言葉を思い出していた。
そして、昔、税務署の署長をしていたAさんが

「あんたとこの、おこまさんの字、すごく立派な字なんで額にしたいと思って大事にとってありますんや。それが飲み代の請求書ですけどね。毛筆で何がいくら、何がいくらと書いてあるんですけど、まあ見事な字ですわ」
と、言っていた事も思い出していた。

## 着物

「良子さん、良子さん、今な、おばあちゃん帰りなしたから、ちょっと迎えに出とって。そこの四ツ角が危いさかい」
和服の仕立ての上手な山本さんから電話が掛ってきた。
（又、行かれたんだ）
先日から、毎日のように山本さんの家へ行く。若い時から、たくさんの着物の仕立てを頼み、話もよく合うので、山本さんの家へ行くと、一時間でもおしゃべりをしてくる。単なるおしゃべりかな――と良子は思っていた。
と、ある日、山本さんの家の前を通ると、
「ちょっと、ちょっと」
と、呼ばれたので、自転車を止めて家の中へ。
「あんな、あんたとこのおこまばあちゃんこの頃おかしいのと違う？　多い時は、一日に三度も見えてな。あたいの着物もう出来上りましたかって言われるんよ。昔はよく縫わしてもらいましたけど。もうあのお年ですやろ。ぎょうさん持ってみえるから新しい着物は要らんのとちがう。
それでな。はじめは判らんかったから、そんなの預ってませんよって言ってましたけどこれはちょっと、さすがのおこまさんも呆けてみえたのかなと気が付きましたんや。
それからは、おばあちゃんがみえると、まだもう少し仕立て上ってへんで、又、出来たら持ってゆきますわって言うと『あ、そうかほんなら頼むわな』と、言って帰らはんのよ。でもな、なんぼ来てもらってもよろしいんですけど、この頃、自動車が増えましたやろ。この前の道もよう通るようになったので危いですやろ。わたしな、いつも外へ出て大丈夫やろかと心配して見送ってますんや。足は丈夫でしっかりと歩いてみえますけどな。昔の人やで、道の真中歩きなさるやろ。車がくるとヒヤ、ヒヤしますんや。四ッ角を渡りきるまでじっと見てはいますけどな。
でも、九十になっても女は女ですなあ。きちんと半巾帯しめて、髪を結って、まだ着物が欲しいなんて感心しますわ」
「こないだもな、良子さん冬物のウールの反物買うてきてって言われたので呉服屋さんで選んでもらったんですわ。細かい柄でしたけど、しゃれたのがあったので買うてきましたんや。
そしたら、こんな地味なん、よう着やんわ。良子さん悪いけどもっと派手な柄のと替えてきてんか、って言われましてな。少し柄の大きなのと替えてもらってきましたわ。又、持ってきますさかい縫ってあげてな」
家へ帰ると祖母は鏡の前で髪を梳いていた。
「おばあちゃん、仕立屋の山本さんがな、着物縫い上ったら持ってゆきますって言ってみえましたよ。
車がよう通るで一人で出やんといてほしいわ。出るときは私に言ってな」
祖母は、鏡の前で居眠りをしながら、こっくりとうなずいていた。

## 芸事

九十才を過ぎても、祖母の歩く姿は、しなしなと、襟元を少しあけ、何となく女の色香が残っていた。
少し抜き衣紋風に着た肌の白さは色っぽかった。毎朝起きると、着物を替え、半巾帯をいきにしめて、きれいに髪をとかしつけていた。
おこまさんは、八人兄妹の一番上だった。そんなに貧しい家でもなかったのに、芸事が好きで自分の意志で芸者になったらしい。
明治時代に、はじめて出来た学校と言うか、寺小屋風な所へも通っていたそうだ。読み書きソロバンも上手、毛筆をもって、さらさらと書く字は抜群だった。その時代の女性は和裁とお習字を主に教えてもらったらしい。
店のお客さんが
「おこまさんにもらった巻紙の手紙は、額に入れて大事にしてありますわ」
と、言っていたことがある。
芸事が好きで、清元、端唄、浄瑠璃、何でも一通りこなした。伊賀上野の方で売れっこの芸者だったらしい。
どんな縁があったのか、主人の祖父が先妻を亡くして困っていた時に、今の祖母が後妻として嫁入りしてきたのだそうだ。先妻の二人の子を立派に育てあげ、祖父亡き後も、一人でがんばって旅館を切り盛りしてきた。
昭和二十年前後、津市の中心地が戦災にあい、戦後の復興と同時に、旅館は連日の宴会等で賑わい、裏庭をつぶして建て増しをしていった。
男まさりの一面もあった祖母は、税務署から、県庁、何でも一人でさっさと交渉に出かけて行った。
一度、良子がついて行った時も、県庁の知事室へ堂々と入って行った。
良子が、おずおずしていると
「何してんの、早よ入り」
と、大きな声でうながした。知事さんがにこにこと笑っておられた。
その帰り道、岡三証券の会社へ寄り、またまた社長室へさっさと入ってにこやかに話をしている。結婚間も無くで、田舎から出てきた良子は、どぎまぎして廊下にたたずんでいた。
九十を過ぎて、呆けがひどくなってきた時も、

昔から愛用の三味線を手渡すと、しゃんと姿勢を正し、すばらしい音色を出した。
時々、居合わす店のお客さんが
「いい音色やなあ。誰が弾いているんやろ。ああ、そうかおこまばあさんや、おこまさんやったら上手やわなあ。まだしっかりしてはるがな。」
と、おばあちゃんの部屋へ入って行く人もあった。
床の間に飾ってあった謡用の鼓も、皮を張り替え、紐を新しくしてもらって、祖母の膝の上へ置いてあげると、これも澄んだ音をひびかせた。良子達が真似をしても駄目だった。

## 電話

昔とった杵づかで、祖母は幾つになっても商売は大好き、旅館の客あしらいも上手だった。田舎から嫁いで来た良子には、何年たってもかなわないことだった
玄関に入ってみえたお客さんをにこやかに迎え、愛想よく相づちを打つので、お客さんは、
「おこまさん、元気だねえ。いつまでも若々しいし、よろしいですなあ」
と言う。
客との応答を聞いていると、呆けているのは、全くわからない。
多忙な時は、ついつい近くにいる祖母が、電話をとる。
「はい、はい〇〇さんでいらっしゃいますね。人数は十人さま。お時間は夕方六時からでございますね。わかりました。お待ちしております」
良子達が走って行った時には、受話器を置いてすまし顔。
「おばあちゃん、どなたからのお電話でした？」
「さあ、どなたからやったかなー。名前忘れてしもうたわ」
宿泊客の他に宴会も引き受けていたので、困ったことが度々あった。
突然のお客さんでも対応できるようにはしていたが、来店のお客さんは、
「おばあちゃんに電話しときましたがな。まあ幾つになってもしっかりしてみえますなあ」
と、祖母をほめている。呆けてきたことなど全く気付いていない。
お客さんは予約済みと思っているからさっさと奥の部屋へ入って行こうとする。良子達はあわてて対応をしなければならない。
お手伝いさんは、ブツブツ言いながら、あわてて部屋の用意をしなければならないので、祖母に向って、
「おばあちゃん、これから絶対電話とらんといてな。わたしらに替ってほしいわ」
半ば怒りながら言っている。だが、祖母は、「ハイハイわかりました。今度から絶対に聞かへんでな」
と、言いながら、他の者がてんやわんやしている間に又もや、受話器をとっている。
「ハイ、そうですか、そらよろしいなあ。そなお待ちしております。どうぞ」
電話の主は誰だか判らない。

## 風呂敷包み

ある日、良子が祖母の部屋を掃除しようと入ってゆくと、大きな唐草模様の風呂敷を広げて、よそゆきの着物や帯を包もうとしていた。長襦袢に、下着、襟の替えまで入っている。
いつ持ってきたのか、新しい下駄も箱入りのまま入っている。
「おばあちゃん、何してんの。そんなにたくさん着物包んで」
「あんな、今から一身田の家へ帰りますんや。長いこと大阪で遊ばしてもらって、そろそろ帰らんと。タクシー呼んでんか。この荷物重いさかい、貴女さんも運んでほしいんや」
「おばあちゃん、ここ一身田ですよ。おばあちゃんの家ですがな。ほら、おばあちゃんの部屋ですよ。そんなことしたら上等の着物が、くしゃくしゃになりますよ」
「いいや、ここは大阪ですがな。長いことおらしてもろうてすんませんでした。お芝居も見せてもろうたし、一ぺん一身田に帰らなあきまへんのや。早よタクシー呼んでんか」
ああ――またはじまったなと、良子はあきらめて、主人を呼びにゆく。
「あんな。おばあちゃん大阪の弟さんの家にいるつもりらしいんや。一度、車に乗せたげて、一身田の町をぐるっと廻ってきてほしいわ」
「またかいな。この忙しいのに面倒なこと言うなあ」
と、宿泊客の夕食の仕込みをしていた主人は、白衣を着たまま車を玄関へ廻してくれた。
「おばあちゃん、車来ましたさかい乗って」
「おおきに。この荷物重いさかい玄関まで運んで車に乗せていな」
丁度、前を通られた近所の奥さんが、
「おばあちゃん。大きな荷物持ってどこへ行かはんの。又、大阪の親戚へ行かはりますんか」
と、大きな声で祖母に声をかけて下さったが、祖母は知らん顔。
ふと祖母の足元を見ると、良子の赤い鼻緒の下駄と、祖母の藍色の鼻緒の下駄を片方ずつ履いていた。
車が動き出すと祖母は、にこにこと手を振って、
「お世話になりました。おおきに。長いことすんませんでしたな」
と、頭を深々とさげていた。
町を一周してきた車の音に気がついて、良子は玄関に走った。
主人が大きな荷物をおろして、どさりと置いた。
「もうこんなこといややぜ。あしたはようせんわ」

「おばあちゃんお帰りなさい。大阪は楽しかったやろ」
「ああ良子さん、長いこと留守して、すんませんでしたなあ――。もう毎日お芝居やら有馬温泉やら遊ばしてもろうていましたんや。来年は良子さんと一緒にきてくれって弟が言ってましたわ。今度は、あんたと行こな。
楽しかった。ほんとに楽しかった」
と、いいながら、仏間に入って手を合せ、お線香をあげて、さっさと自分の部屋へ入って行った。
良子が運んでおいた風呂敷包みを広げて、一枚一枚、着物を伸ばして、ていねいに箪笥の中へしまっていた。
中には
「これはよう着たさかいなあ」
と、言って衣桁に掛けていたのもある。
そして……一週間に、二度位は同じことを繰り返し、とうとう祖母の着物はくしゃくしゃになってしまった。

## 母を訪ねて

九十才を過ぎた祖母が、
「お母さんいやはりますか？」
と、ほんの五十メートルほど向い側にある祖母の実家である、すし屋さんへ入っていった。
「ええ！　お母さんて誰？」
朝の仕込みも終って店の暖簾を出そうとしていた店主の正男さんは、何のことかと首をかしげた。
正男さんのお母さんは、五十代で亡くなっていた。
「お母さんさ、わたいのお母さんですがな。元気でおますか？」
「おばさんのお母さんて？　いつも奥に坐ってた僕らのおばあさんですやろ。もうとっくに亡くなってますがな」
「そんなことない。いつもここに坐って、わたいがいくと、目が見えやんでも、喜んでなあ。生卵一つくれたんや。どこ、いかはったんやろ」
祖母の母は、やはり長生きで九十過ぎまで生きられたが、白内障がひどくなって、晩年の十年位はほとんど目が見えなかった。
それでも最後まで寝込むこともなく、店の近くの座敷にすわって、訪ねてくる人の応対をしていた。
（おかしいなあ）と思った正男さんは、（ははん、おばさんもとうとう呆けてきたんだな――）と感づいて
「あんな。おばあさんな、今トイレへ入ってますわ。また、お昼から来たってんか」
と、うまく言ってくれたらしい。
家へ帰って来た祖母は、良子に言うのだった。
「さっきな。お母さんどうしているやろと思って訪ねて行ったけど、おらへんだわ」
「ええ！　おばあちゃんのお母さん！　今みえたら百二十才位ですがな。そんな……」
良子は絶句してしまった。
九十才になっても母は母、母が一番恋しいらしい。
良子は正男さんにそっと電話を掛けた。
「あんな、正男さん。この頃おばあちゃん大分呆けやはったんで、又、行かはったら、あんじょうかわしといてんか、頼みます」
「ああ――大分呆けはったなー。あんだけしっかりして、一身田中の人がかかってきても負けはらへんだんやのになあー。次からうまいこと言うときますさかい」
あくる日も、そのあくる日も、祖母はいそいそと訪ねて行った。
「おばあちゃん、正男さんとこへ行かはるのはよろしいけど、四ツ角で危ないさかい車に気をつけてな」
その時、だまってうなずいていた祖母が、午後になってどこにも姿がない。自分の部屋で横にでもなってみえるかなと思っていたら、裏門の開く音がする。祖母の小さい体があたりをそっと見まわして、入ってきた。
良子達が店の玄関の方で用事をしていたので、そのすきをぬって、こっそりと裏門から抜け出して正男さんのお店へ行ってきたらしい。祖母の手には小さな巻ずしの包みがにぎられていた。
祖母はすました顔をして廊下を渡って自分の部屋へ入って行った。
その年の暮れのことであった。かねてから計画していたらしく、正男さんのお店が正面だけ改装された。店の入口も北側から東側に替り、暖簾も大きく新しくなった。
改装の間、祖母は時々道の反対側に立ってじっと見ていた。
すっかりきれいになり、中華料理の看板もかけられて、店はますます繁盛した。
「おばあちゃん。正男さんのお店立派になってよろしいなあ。おばあちゃんもうれしいですやろ。お店の中も見てみえましたか」
「……」
祖母からは何の返事もかえってこない。それもそのはず、改築されてからも二日に一度は、正男さんのお店の前までは行くのだが、じっと立って眺めているだけで中へ入ろうとしない。右を見たり、左を見たりしているのだが、首をかしげては、きびすを返して自分の家の玄関に腰を掛けてぼうっとしていた。
「あたいの生れた家がない。家がなくなってしもうた」
と、時々つぶやいていた。

## 牛乳と生卵

「あたいは小さい時から体が弱いさかい、牛乳と卵だけは切らしたらあきまへんのや」
祖母は、いつもそう言いながら冷蔵庫の前へ立っては、牛乳を出し冷たいまま、ツウーツウーと

飲み干していた。
　良子達は、冷たい牛乳を飲むと、どうしてもお腹の具合が悪くなるので、ひまな時間ができた時に、温めて飲んでいた。用事をすまして、お昼すぎに飲むことが多かった。
　そうこうしている間に、又も祖母が冷蔵庫を開けて、二本目の牛乳を飲んでいる。
「ええ！　またあらへんわ。おばあちゃんが飲んでしもたんや」
　良子の二人の子供の分までないときがあるのだ。一日に三本も四本も飲み干してしまうこともあった。お腹大丈夫かしらと良子達は心配するのだが……
　その上、客用に十キログラム入りの大箱で買っていた生卵をみつけると、それも日に二度、三度と小さな穴をあけて、そのままツーと口の中へ入れていた。
　ある日、家の中でつまずいて、足が痛い、足が痛いと言われるので、骨折でもしたのかと思って、すぐ外科の医者へ連れていった。
　医者はすぐ、レントゲンを撮ってくれ、
「ああー、おばあちゃん、たいしたことあらしません。打ち身だけで一週間もサロンパスを張れば直りますよ。それにしても、このおばあちゃんの骨はすごいですなあ。七十才位の若い骨をしてみえますよ。しっかりとカルシュームをとってみえますね。何を召し上ってますんや」
　と、しきりに感心をしている。
　そら、そうでしょう。牛乳はしっかりと飲むし、うなぎ丼は大好き。たまに、親せきの人が来て、うな丼の出前を取ると、祖母はまっ先に箸をつけ、他の人がおしゃべりに夢中になっていると、知らぬ間に人のうな丼にまで手をつけて、すました顔をしていた。
　通常の食事は、ほんの少ししか食べられないのだが。
　すき焼きも大好きで、良子の二人の息子達と最後までテーブルを囲み、野菜はそっちのけで肉ばかりつまんでいた。胃はあまり丈夫ではなかったのだが。
　良子が、おばあちゃんのお腹大丈夫かなあと、心配するほど食卓を離れようとしない。
「おばあちゃん、この肉がやわらかいよ」
　と言いながら、曾孫にあたる良子の息子達も祖母にやさしくするから、喜んで生卵を割っては、お替りをしていた。
　肌がますますつるつると輝いてみえた。

## 入院

　九十五才にもなると、さすがの祖母も弱くなってきた。
　着物も毎朝替えることもなくなり、ねまきのまま、玄関に出てくることが多くなった。
　その頃は、「認知症」という言葉もなく、ただ呆けてきた人は家の恥だと思って、近所の人にもかくさなければならなかった。
　祖母は大きい声を出すでなし、近所の人はまったく気付かなかった。祖母の顔を見るとお元気ですな、お元気ですなと言ってくれた。現在のようないろいろな制度もなく、ひたすら家族が面倒を見るより仕方がなかった。
　れっきとした病気という意識もなく、病院も入れてくれなかった。まして養老院も少なく、あっても一人暮しか、いろいろの条件があった。
　寝こむほどではなかったが、おもらしもひどくなり、時と所を選ばず、客のたて込んでいる忙しい時に限って、そういうことが多くなってきた。
　昔は、四、五人も居た住み込みのお手伝いさんも、その頃は時代の波で人件費が高くなり、忙しい時だけ臨時に来てもらっていた。
　たった一人残ったお手伝いさんが、親切に看てくれるのだが、とてもお風呂まで手がとどかなかった。
　だんだん夏に向ってきた時は困りはてた。
　さほど肥えてはいなかったが、しっかりと栄養をとっていた祖母の体は、主人と二人で抱き上げてもずっしりと重かった。
　困り果ててかかりつけの医者に相談の電話をかけてみた。
　はじめは
「ぼくがときどき見てあげるよ」
　と言っていたが、二、三日してから、
「ぼくの友達が経営している病院へお願いしてあげたから。丁度、病室が空いていてね。
　入院させてあげますよって。すぐ用意しなさい。そこは、内科、外科、神経科とあってね。
　たくさん入院患者はいるらしいけれど、たまたま離れ風の病室が空いたそうだから、明日病院の車で迎えに行ってあげるって。良かったね。安心しなさい」
　と話を付けてくれたようだった。
　良子は内心ほっとした。
　あくる日、病院の車が迎えにきてくれた。すぐ主人の車で後を追う。
　里山の裾にあるその病院は敷地も広く、病室も新しかった。離れ風の病室は、殊にきれいだった。緑の多い庭に囲まれ、二人部屋だがベッドは空いたまま整頓されていた。
　看護師さんも、てきぱきと、早速祖母におむつをあて、体をきれいに拭いてくれた。
「ここどこ？　家と違うなあ」
　と、最初は天井を眺めていた祖母も、ベッドに入ると、うつらうつら眠っていった。
　良子達は、やれやれと安心して家に帰った。
　二、三日してからのことであった。誰から聞いたのか、生さぬ仲とはいえ、義理の子にあたる主人のおばさんが、顔色を変えて、飛んできた。
「良子さん、良子さん、おばあさんを病院へ入れたんですってな。近所の人が言うてましたわ。かっこ悪かったよ。なんで家で看病できませんのや」

血圧の高い顔を、さらに赤くして玄関へ入って、どかんと坐られた。
「すんません、それがね、毎日が大変でして、商売をしてなかったらいいんですけど、お風呂が第一よう入れませんやろ。悪いけど、病院にお願いしたんですわ。本当に申し訳ありません」
と、ひたすら頭を下げるより仕方がなかった。
おばさんは、しきりに
「世間さまにかっこ悪い。何とかできませんでしたんか。もう、かっこ悪い。かっこ悪い！」
と、ぶつぶつ言いながら、玄関の戸をぴしゃりと閉めて出て行った。
良子は、誰に叱られても仕方がない。今の状態では、とても家で看ることはできない、と思うよりほかなかった。
明くる日の午後、手のすいた時に、自転車で病院へ行く。この前空いていたベッドに、祖母よりももっと若い人が、口をあけたまま眠り呆けていた。
足音をしのばせて、ベッドのそばまでゆく。祖母も大きないびきをかいて眠っていた。頭もきれいに洗ってもらって顔や手足もさっぱりと拭いてもらってあった。
良子は、そっと病室を出て庭の方へ廻った。と、どこからか年配の看護師さんが現れて、
「ちょっと、ちょっと、奥さん。あんたとこのおばあちゃんは商売人さんですねえ。わたし達が、朝晩体温を測りにいきますとね、『あんたら、なにぼやぼやしてるんや。早よお客さんの部屋へお酒運ばなあきませんやんか。お客さんほっといて、こんな所でおしゃべりしてたらあきませんがな。早よ早よ』
って言われましてね。皆びっくりしてますのや。ご自分のおうちだと思って、商売人さんですなあ。ここまできてそんなこと言われますんよ。わたしらも『はい、はいおばあちゃんすぐ、お酒をもってゆきますわ』て、言って、体拭いたり、体温測ったりしてますの。感心しますわ」
祖母は三ヶ月ほど入院していて九十五才の命を全うした。
祖母が命より大切にしていた着物は、派手好きとはいえ、良子達にはとても地味だったので、四十九日の法要が過ぎてから、祖母の一番下の妹さんに送ってあげた。大きなダンボール二つにぎゅうぎゅうつめて、帯も、新しい半襟も送ってあげた。
名古屋の小牧に住んでいた妹さんから
「良子さん、たくさん姉さんの着物頂いてありがとうございました。姉さんはけちだったので着古した浴衣一枚もらっただけで、今までどれだけ頼んでも絹物はもらえませんでしたわ。あんなにたくさんもらってよろしいんですか。さすが生地のいいものばかりで大事に着さしてもらいます」
と、喜んで電話をしてきた。
「それがね、おばさん。大阪へ行く、大阪へ行くと言っていつも風呂敷に包んでみえましたので、くしゃくしゃになってると思いますから、またお嫁さんにでもアイロンかけてもらって下さい」
「ありがとう。私が死ぬまでありますわ。ありがとう」
良子は、胸に込みあげてくるものがあった。

了